

緊急気管切開術を要した喉頭蓋炎の検討

野々山 宏 有元 真理子 稲川 俊太郎 平山 肇
谷川 徹 小川 徹也 植田 広海
愛知医科大学 耳鼻咽喉科

急性喉頭蓋炎は、急激に浮腫が進行して高度な気道狭窄から致命的となる疾患である。耳鼻咽喉科領域において救急対応の必要性がある疾患の一つで、迅速かつ的確な処置が必要とされる。診断や治療の遅れ、疾患の認識がないため死亡例も報告されており、慎重な判断と対応が必要なのは疑う余地はない。臨床的な検討は多数の報告があるが、気管切開の適応などについては明白なガイドラインがないのが現状で判断に苦慮する場合も多い。また診断・判断の遅れが致命的となりうるため、喉頭蓋の急激な腫脹が予見可能か検討したいと考えた。また適切な時期の気管切開術の施行で気道の確保を行えば、治療に導くことができる予後の良い疾患であり、気管切開術を行う適応、時期も重要であると考えられ、当院での過去の事例の検討をおこなった。

平成10年7月1日から平成22年6月30日までに愛知医科大学耳鼻咽喉科で急性喉頭蓋炎と診断された症例のうち緊急気管切開術に至った症例について、宇和らの分類による各Group別気管切開実施率、緊急気管切開に至るまでの時間、気管切開手術法、事前に気管切開を考慮すべき因子等をretrospectiveに調査したので報告する。